

中井弘関係文書の紹介(三)

黎明館収蔵の中井弘関係文書のうち、第一、二集につづいて、未紹介分のほぼ半数量の書簡、六五通の解読文を紹介する。差出人の人名については、第一集に中井弘関係文書一覽として掲載されており、今回は、長岡外史(六一)から由利公正(八七)までの二七人の書簡を解読した。

書簡の解読については、次のようにした。

- 1、解読順は巻物の順に従い、年代の考証はしなかった。
- 2、体裁は第二集にならない、適宜読点を付した。
- 3、漢字は原則として常用漢字を使用し、変体仮名は現行かな文字に改めたが、者、江、而、茂、与はそのまま残した。
- 4、判読できない文字は□で囲み、文意の通じない文字は(○カ)と傍注を付した。
- 5、封筒もしくは上包の上書は「」で囲み、封じ目の緘や封などの文字は略した。
- 6、郵便の消印からわかる年号は日付に傍注を付した。



(松方正義書簡)



(三島通庸書簡)

堂
満
幸
子

六一 長岡外史

1 余寒激敷候へ共、御清栄拝賀、

御手数被下候元帥之御揮毫、殊ニ立派にして、弊樓には物過キ候、御序万謝之誠意、御申出置キ被下度候、不一、

二月十七日

外史生

石崎様

六二 中江兆民

1 「西京荒神橋

三月二十二日

中井弘様

東京小石川

左右

中江篤介

不相更御盛之由、奉賀候、

老母死後之比ハ、御丁寧香料被掛貴意、御蔭を以て葬式之費ニ充て、

幾久敷奉感謝候、生事去冬議會解散の報ニ接し、従來の行掛、不得已

帰京、服明より東西奔走、夢中の合戦の如き真似を為し、近日又々北

帰之心得ニ御座候、○久永兼三帰京、貴著、漫遊記程並ニ膝掛御惠贈

被下、是又御深情厚御礼申上候、○今田より承候得者、生留守中、鄙

著、理学釣玄売却の件ニ付、林京介より御難題申上候由、是ハ定て林

と荆妻との軍略ニ出候事ニ可有之、將又金田等も林より御無心申上候

由、此辺ハ御一笑ニ附し被下度、呵々、

生北行之割出ハ、彼地より一書を呈し、大略申上候、官民之相撲も一、

二年之事ニハ有之間敷、双方俱ニ氣息奄々の境ニ一たびハ陥り、然後

何か一段落と相成可申、生ハ其中北地ニ於て、二頃の田を営し、一年

強半ハ彼地ニ居り、相撲の勝負時ニ京地ニ出現して、聊カ縦横之略を

運し、徐ニ世熱の分離を疎つの軍略ニ有之、大兄達識御亮察被下候と

奉存候、先者右計、不一、

(明治廿五年)

三月二十二日

兆民生

桜洲詞兄

大兄ニ向ふて乞貫するにハ、御面談之上か、又ハ寸楮を以てす可く、

兎ニ角小生自身之名を用ふ可く、今後他人より小生之名を以てする

ものハ、悉皆贖物、又ハ余計の世話と御聞流し被下度、汚濁界中、

聊カ義の字の意義を存し置くこと、生之素願ニ御座候、御一笑被下

度候、余寒尚強、為道白玉、

六三 永田義近

1 時分柄無御厭、益御奉務之筈、奉遙察候、陳者当地貴閣皆様ニも御

無事、御同慶仕合ニ奉存候、扱小生義、是迄尊大公之御丹精ニ儲り、

其効驗を以、来ル廿一日福岡県七等属ニ拝命仕、本月中同地へ赴任之

積リニ御座候、該地着之上者、尚可申上候得共、不取敢御養否御伺旁

御礼迄、草々頓首、

十二月廿四日

中井様閣下

永田義近

六四 西村捨三

1 「中井滋賀県知事殿

西村捨三

親展急

拜啓、尔来益御安康、奉欣賀候、又手旁觀、高島先生一条、別紙之通

昨日拙生起家仕候、何卒御一覽御潤刪、御進達方偏ニ奉希望候、大分

東西旧幕人等ヤカマシク、外ノ違ヒ、終ヒニフテサレニ相成候テハ、

折角多年之仁政ニも指響キ、遺憾之至ト奉存候、此事ト、ノヒ候得ハ、
彦人始めて青天白日之場合、未來 閣下ヲ神ト仰キ可申候、愚悞之衷
情御下察是仰、小牧氏ハ、黄石老參り懸、理公ニも近日拝晤申候手筈ニ
有之候、参考書類ハ、直弼カ大老前々開國之議ヲ抱持候證拠ニ候、右
カナクテハ直打無之候、明日拝晤迄、一応御見分可仰御指揮候也、匆
々頓首、

六月十六日

西村捨三

中井老閣

2 「中井知事公閣下

親展

西村捨三

肅啓、尔来益以御安康、御多忙ニ被為入候半、折角御愛重奉祈上候、
拙生も廿日前後出立之積り、一寸拝顔、前途四、五点之希望申上置度、
万々御存候得共、何分日子無之、残念千万ニ奉存候、此上ハ精々参拜、
且觀覽者之多数、希望之外無之、拙生性急常々帰靴之思ニ御座候、何
卒偏ニ仰御揮擢候、協賛会々各地御紙面願上可申、宜敷奉希上候、出
立掛仙台地方一拝可仕候間、先ハ此段上申、匆々頓首、

(明治廿七年)
十一月十六日

西村捨三

中井公台

3 「京都上京荒神口

北海道炭磁鉄道会社

中井京都府知事殿

西村捨三

親展

新年御慶千里同風、芽出度中納候、先以老閣御安泰御超歳、奉謹賀候、
劣生嶸山適帰、乍憚仰御省念候、先八年甫拝祝、匆々謹言、

一月四日

西村捨三

中井老閣下

尚々、段々平安宮葺も相運、結構之至、○東本願寺入仏供養ハ、準
備も可有之、是非御内意被下度奉存候、○伊勢之方出立、是申談居
候參宮鉄道、一月中開業割引候由、伊集院君ナド御出向、明年多数
京勢両処参拜者之懐向被馮御考候ハ、幸甚、○海外広告ハ、十分之
用ヲナサズヤニ奉存候、○定メテ大演習ハ、出来候事ト奉存候、拜
具、

4 「京都府廳

東京築地二丁目

中井京都府知事殿

西村捨三

親展

尔来御安康被為入、奉欣賀候、頓ト御面晤之期ヲ失し残念千万、箇長
も明日立可仕候故、此上紀念祭宜敷仰御揮擢候、山縣伯ハ官内下調た
も大ニ心配ニ預り候次第、此上平安宮建設等、又々其一切之御厄介物、
宜敷御話合奉希候、拙生ハ此機ニ先帝三千年祭御執行、天下ニ大赦名
告致、大阪両師團ノ大演習等盛望希望、一寸モレテハ、含雪伯迄御申上
大ニ嘉納セラレ、
御年忌西洋満年号ナ
レハ二十九年トナル 候次第、余リゴテ付候世の中、
剖判以来之大騒キヲ持込候てハ如何哉、此辺之機略仰御指揮度、期御
一面候次第、是ニ京都人は氣ノ長キト、掛引不達者、中々御骨ノ折ル
、事ト奉存候、尚心付迄ニ可申上、含雪伯へ之一書御届方奉希上候、
匆々頓首、

(明治廿六年)
十一月廿一日

西村捨三

中井弘府公閣下

5「京都荒神口私邸

北海道炭砒鉄道株式会社

中井京都府知事殿

西村捨三

親展

肅啓、時下朝夕朝氣相催候処、老關比日御不例之由、如何ナル御容体ナルヤ、痛心ニ不堪、本道島田致千石承知、中々之御天患ト申事、実ニ意外之事共、来年之御物前、十分御加養所祈ニ御座候、山海千里訪問不如意、不取敢御様子伺迄、勿々頓首、
(明治廿七年) 十月五日

中井公閣下

西村捨三

六五 西村虎次郎

1「中井弘様

西邑虎次郎

貴酬親展

尊簡奉拝読候、春和之候益御安泰被遊御座、奉欣慶候、扱過般御在京中ニハ、毎事蒙御懇命、深感銘候、其際御沙汰被下候高田義助、地所抵当取引之事件、西京店へ取調申遣候所、漸分明候由ヲ以報道候ニ附、尚速ニ実行可致之旨、且者従前委託代理扱之義も、正確之約定更ニ締結シ、可相委之旨ヲモ申附遣候、尤貸金額利子等之義ハ、西京店ニ議定シ可申談答ニ有之候条、本人ニも程良御伝奉願候、扱過般高崎君邸ニ而不意被捕虜、利劍之御強談ニ戰慄不堪も、本行ニ於テ一生懸命之大事、高崎君嚴威逆ニ不易存候得共、頑愚之情ヲ以終ニ謝絶仕候事ニ候、折から尊君之御笑草ト相成候事、甚以恐縮之至奉存候、時々ニ者不思議五色之吹風有之ニ恐入候、世直シ云々之神念之外無他候、先右尊酬申上度、如斯将来之時氣、御養保專一ニ被遊度、奉專祈候、

恐惶謹言、

三月廿九日

中井弘尊君

西邑虎次郎

玉閣下

六六 野村 靖

1「工部省

中井大書記官殿

野村 靖

奉復親展

貴墨拝見仕候、縷々御深慮之趣敬承仕候、丁度過剋弥之助来局、過日之返答申出候、即大体に在ツテハ、引受相試可申トノ事にて候、聊詳細を不尽ハ確定ハナラヌと申候故、右は老台と直チニ御打合を可致と申聞候、此段御含以此上御配慮奉仰候、奉復頓首、

四月二日

靖拜

中井老台侍史

昨夜御手翰之旨ニ付而ハ、氣懸リ罷在候へ共、只今之御手封にて、

安堵仕候、

拜

2 拝啓、昨日御願仕置候古画、何卒御工夫被下度奉頼候、伊集院翁江別書ナシ、老兄より可然御頼奉願候、大抵三百円以内ニテ、三家江向け度候、尤も表装箱ナドモ、右の額内ニテ遣り付度候、宜敷御頼仕候、頓首、

六月四日

靖

中井様侍史

3「中井老台侍史

野村 靖

御書拝読、御教示之旨ハ、好機を得内話相試可申候、右ニ付而ハ金額之高過日御示シ御示シ被下候ハ、猶更咄しも堅り可申候、本日ハ一寸参上可仕候、万其期に附申候、奉復頓首、

三月三十日

靖

中井老台侍史

六七 野津道貫

1「築地二丁目拾番地

中井弘殿

野津道貫

追日炎熱増進之候ニ候へ共、愈御清適奉賀候、陳ハ明廿二日亡父三周年回相当ニ付、麗餐差進度、尤山縣・大山列相見候筈ニ候間、可成御操合ヲ以、午十二時御来臨被下度、此段御案内旁奉得貴意度、匆々拝具、

七月廿一日

野津道貫

中井弘様

逐而御支障有無、乍憚御答報煩度候、以上、

六八 原敬

1「京都荒神口

東京芝公園第七号四番

中井弘様

原敬

親展

拝啓、皆々様益御壮健と奉拝候、当地先ハ無事、御休神被成下度候、お貞病氣もさまで之事無之、御安心被成下度候、龍太郎君之事ニ付、戸谷君より御相談有之候処、再ヒ感化院ハ如何可有之哉、御一考被下度候、高瀬氏果シテ承諾可致哉否不相分候得共、

兔も角本人ハ再ヒ入院致候とて、却て反動ヲ起候ニ相違有之間敷、既

ニ廿六歳ニも有之、迎も同院ニテ性質変更可致とも不被考、夫レヨリ

ハ過日も申上候通、早ク妻帯之上一戸ヲ構サセラレ、幾何ニても給金

ヲ取ラセ、夫レ江多少之補助有之候方ハ可然、同人之性質トシテ、多

少過深も致、又ハ種々架空之考も可致、ナレトモ其内ニ者多少前途之

考ヲ立ツル事ニ思付候事も有之、即チ向後世事ニ経験被為致方ハ、縦

令一沈一浮面白カラサル事も可有之候ヘトモ、其内ニ者前途之方向も

定ムル必要ヲ悟り候場合も可有之哉ト存候、感化院ニテハ如何程高瀬

ニ骨折ラセ候とて、二十歳前後まで之少年ナレハ、或ハ性質ヲ変ユル

事も可有之ニ存候へ共、今日之年齢ニてハ、到底無益カト存候ニ付、

其辺篤と御熟考之上、御処分相成候方可然奉存候、

与一君ハ時々来訪も有之、小生ハ先以て放任之姿ニ致置候、別ニ悪事

ト申程之事ヲナスニモ非サレハ、貧乏之極改正スル事も有之、其時機

ヲ待タスシテハ、将来之為メ却て宜シカラズと存候ニ付、今日之所ハ

先以放任致置候間、右様御含置被下度候、不取敢要用迄申上候、匆々

頓首、
(明治廿六年)
十月一日

敬

中井上人座下

2「

東京芝公園第七号四番

中井弘様

原敬

親展

拝啓、与一君事別紙ヲ示シ、且ツ内々小生并お貞々篤と後來之事申談候得共、頑トシテ何等之返答無之、不得已其假打捨置キ、尚北海道行

間接ニお貞より時々相勸メ候得共、是亦不応由ニテ、如何とも難致、
成城学校トカハ退校ニ取計、去一日お貞も大磯江保養ニ参り候所、去
三日置キ手紙ノまゝ、何処江カ出行カレ候、其手紙ニハ、今回之勸當
ハ甚不当也、モシ詫入ラハ感化院ニ入ル、事ナラン、故ニ決心シテ去
ル、他日志成リテ後面会セン、目的ハ海外ニ在リ、など認メ有候、固
より貯金とても無之、其内又何ツレヨリカ来書可有之候哉ニ存候、依
テ向来之事ハ、今一度来書カ出現カノ上ニ可致積御座候、或ハ神戸ニ
参り候哉も難計、海外行ハ招券モ六ヶ數事ニ而、誰江カ依頼セスシテ
ハ出来不申、誠ニ困リ切タル次第ナカラ、兎も角も一ト苦勞致し候モ
又薬石ニ可有之候、当分ハ打捨置キ可申積ニ御座候間、御含置被成下
度候、

松君ハ本日出發被致候得共、途中大磯ニ立寄ル筈、同所ニ何日逗留可
致哉未定御座候、お貞も寂寥ニ可有之ニ付、暫時留置キ候モ難計、乍
去何ツレ小生も午後同所へ一泊之見込ニテ参り候積ニ御座候、

右当用迄申上候、勿々頓首、

(明治廿八年)

八月五日

敬

中井老座下

御老父様御不快ナリシ趣、昨今御全快御座候哉、宜敷御伝声被致候、
御愛犬モ死亡之由、御力落之事ニ存候、

3 京都荒神口

東京芝公園第七号四番

中井弘様

原 敬

親展

拝啓、久々御無音仕候所、益御多祥奉賀候、当地無事、お貞近日より

少々不快ニ御座候得共、病臥と申程ニ者無之、只昨年之如キ事ニナラ
又様、予防中ニ御座候、

龍太郎君も時々発病之由、兎も角妻帯、一家ヲ構ラレ候事ハ如何御座
候哉、篤と御考有之度事ト存候、再度感化院も際限ナキ次第カト存候
与一君ハ先月初ニ拙宅ヲ去ラレ、神田辺江下宿之由ニテ、先頃ハ度々
来訪、お貞より懇ニ説得致、前非謝罪可仕と申事までニハ相成居候所
江、丁度松君帰京故伝言も有之候ニ付、尚謝罪ヲ勸メ、其上ニテ向來
之事も何トカ取計候考之所、其後ハ来訪無之候、窃カニ察スル所にて
ハ、他之書生連中より内々補助スル様之事、或ハ無之哉ト存候、否ラ
サレハ到底今日まで下宿代ヲ支払フ道無之事ニ御座候、兎も角今暫ラ
ク放任致置カレ、其内謝罪セシメ候様取計可申候付、其節ニ至リ、難
堪ラ叱責スルト同時ニ、將來之方向共一定仕候様致候方、可然事ニ存
候、今日彼此説諭候者、何之詮モ無之様ニ考候、御含置被下度候、
但斯ク多少之望アリテ放任致置候ニ拘ラス、他之書生連中ハ甚タ酷ナ
ルカ如ク思惟シ、却て彼ノ悔悟之道ヲ妨クル様之事ナシト難申、其辺
ハ御注意なし置被下度候、

緑次君軋校ニ付、出籍入用之旨被申送候よし、可否とも御返事被下度
候、惣て書生連中之臨時買物迄小生ニテ、大概要不要之鑑定も相付キ
候得共、夫レニテハ自分ノ金ヲ出ス事ニモ無之ニ拘ラス、あまり制限
スルなと申苦情有之候間、臨時之分ハ一切御地ニ許可ヲ得ヘシト申
談置候間、其御含ニテ時々御指揮被下度、兎も角金に困らぬ学生ハ、
決心鞏固ナラヌニ閉口仕候、

過日御申越野村江送りものハ、蠟燭二円之箱差送候、山縣夫人之方江

も何カ御送カト存候得共、何程位之事にて可然哉不相分、其内御申越
モ之アルヘシと存候ま、本日之葬式ハ既ニ過キ候、乍去何カ御送ニ
御座候ハ、御一報被成下度候、

改革モ未発表ニ至ラス、万事取極リタル様ニテ取極ラス、内外之用事
甚多ク、困却之次第ニ御座候、遂ニ今年ハ一日も休暇モ出来サリシ次
第二御座候、早々頓首、

(明治廿六年)
九月十五日

敬

中井大人侍史

追而お貞之病氣ハ臥床ニ居ル程ニモ無之候得共、何分医者ニ診察ヲ
厭ひ候ニ付、未タ何とも定ラズ、ブラブラ致居候、御序之節ニ、病
氣ニなりたる時ハ、必ラス速ニ医者ニ見テ貰フヘシと、御教示被成
下度奉願候、今日之所ハ固より左まで之事ニ無之様ニ考候、

六九 長谷川好道

1 拝啓、御軫地後御宿痾如何被為在候哉ト、御案申上候、此際一層御
保養專一ニ奉存候、陳ハ御下命ノ件ニ付、更ニ調査致候処、加藤伍長
ハ本郷聯隊区ニ属スル者ニシテ、近衛師団動員下令之場合ニ者、第一
着ニ召集可相成筈ニ御座候、
右御報迄ト勿々如期^(斯ク)ニ御座候、敬具、

一月十日

好道拝

元帥閣下

下執事

猶々時局者漸次切迫之模様ニ被伺、実ニ御配意之程奉恐察候、師団
モ諸般ノ準備殆ト整頓、此ノ点ニ於テハ御放神可被遣候、

七〇 晩

1 「中井君

極親展

晩

御懇書ハ今朝拝読いたし、段々御心配被成下、忝御礼申上候、富永義
ハ于今被召留候次第、いせ勝にも余程心配之至ニ候、乍御苦勞老兄御
親発之上、篤と山下・有川等ハ御示談被成下、何分ニも内裁之姿にて
相済候様御尽力被下候様、偏ニ所希候、実ニ忽然之災難ニ罹らしめ、
生ニおひても残懐之至ニ候、併幸ニ弟丈ハ虎口之難を遁れたれ共、不
図同列ケ様之迷惑ニかゝり候而ハ、何とも心外ニ被為候間、劣弟ニ代
り、何卒御尽力所希候、細事ハいせかつ々直ニ御聞取可被下候也、猶
余之事ハ拝眉ニ可中承候、勿々頓首、

晩拝

中井君

貴下

七一 東久世通禰

1 「中井弘藏貴下

東久世通禰」

寒威増長に御微恙如何御座候哉、且亦去廿日比ニハ小松下坂、直様出
帆之様子、右着迄者は迄之姿ニ而御待被下度、委細大久保江も貴下之
心情申入、輔卿岩倉も承知ニ御座候共、何分即今上坂之処ハさしとめ
かたく、乍御気毒小松下向迄、御待被下様致度、東京知事僕ニ被申付
之勢にて大困居、にけ道を求計御座候、今日者明石丁へ、宇和島中納
言見分之筈ニ御座候、一寸心得ニ申入置候まで、以上、

十月廿二日

2 「中井弘殿

東久世通禧

かけ物添

昨夜者御妨致候、且御国料理忝奉存候、其席ニ而御所望之懸物、過日古壺之御札印迄ニ呈上致置候、驚今朝来り、段々説得、最遺憾無之よし、御安心可被下候、早々要用、拝具、

九月八日

竹亭

桜洲先生

七二 藤田伝三郎

1 拝啓、野生来ル二日頃乗舟、東行仕候、相応之御用有之候ハ、被仰聞度候、過日願置東京御宅、六月一日御譲り受之都合ニ仕度、就而ハ代金ハ別紙預り書差上置候間、御入用之節ハ、何時も差上申候、券状等御所持ナレハ、御抄被下度、小生名儀ニ内替置可申候、此度其符合相付候得者、片付候而仕合申候、サスレハ来月ヨリ之家賃ハ、拙居受取候訳ニ相成申候、内談ハ伊十院へ可仕候間、老台ヨリモ無余義事ニ付、可成明々渡候様、伊十院迄御申遣し奉願候、尤小生も此度御座之用ニハ相成兼、サスレハ急ヲ要スル事ニも無御座候間、可然奉願上候、右御願迄、早々頓首、

五月卅一日

伝三郎

中井殿

閣下

七三 松方正義

1 「中井弘殿

正義

親展御答

花墨難有拝読、明廿三日ニ者、乍残念御断申上度、同日者外ニ約束仕

居候、不悪御汲取、先方江も可然御伝へ可被下候、いつれ今日夕景ニ

者御尋問仕度奉存候、頓首拝復、

二月廿二日

正義

中井賢台

2 「中井弘殿

松方正義

小品二添

拝啓、本日者賢息御機嫌能御発途相成、奉慶賀候、就テハ小魚并洋酒

一箱、御欣之印迄差出候、御笑留被下候ハ、本懐奉存候、草々頓首、

五月卅日

正義

中井賢兄

3 「京都

中井弘殿

正義

親展

托書伊集院君

残暑猛烈難堪候得共、賢台益御清勝被為涉候由、奉敬賀候、陳拙生義今般遂ニ放洛ニ逢ひ、咄々台々極楽浄土ニ消光、御歎ひ可被下事と相察申候、来月ニ相成候ハ、必其地江遊ひ申度、何卒御待可被下候、宮高者近日中々發途之よし、同人着之上ニ、彼是御聞取可被下候、乍憚税所翁江御面会も候ハ、可然様御伝へ可被下候、何も期拝顔相略し度、其内御尋問迄如此御座候、頓首、

八月十五日

海東拜

桜洲先生

再白、折角時下御いとひ御禱申上候也、

4 「中井書記官殿

松方正義

大至急

突然自由之義恐入候得共、明日ハ京都於富へ、午後六川崎辺江遊ビニ誘引約束仕置候処、態各方向江汽車試ニ、吉井氏を遮而承り、夫故富方者断り度存候間、富宿所江右断り状、乍御手数御差出置可被下候、
拝眉御礼可申上候、頓首、

十月廿日

正義

中井君

5 「中井弘殿

海東

必親展拝復

御内書逐一拝承、先夜者結構之御幅御持参、実ニ感佩之至ニ拝見仕候、誠ニ珍敷品ものニ有之候、如何して御見出相成候や、驚キたるものニ御座候、当座よかも私底故、両三日中ニ者かならず為持上可申間、左様御承知置可被下候、先夜者失敬仕候、○議場之模様、余り何も不相運、鉄道買取候法も、昨夜委員会ニ而者否決せしよし、いつれ暴なれ共、極点之方反而可然候半、やるだけやれくと促し候方、上策と奉存候、御高慮如何、御注意此篇ニ願上候、拝復、

十二月廿二日

海東

中井老兄

6 「□国

上野景範様

松方正義

中井 弘様

御親目」

毎度御懇翰御投与、難有拝誦、愈御清適被為涉候由、奉万賀候、二二小生依旧碌々消光、御降慮可被下候、陳者我政府上、当春以来、木戸租稅復任、み鼻肩之御政体と申事ニ而、御改革も初り候得共、未充分之運ひも不相付、何分金か無くては役者揃も六ヶ敷様ニ被察、夫而已ナラス、内務之要品区々之運動迎も、全身之機械相働キ、其功相見へ候程ニ者無覚束、例之弊症故、御深察可被下候、何分内損病一掃之療治者六ヶ敷ものと相見ヘタリ、山丈先生者当春以来、内務省ニ余程精励、其他者不知、御察可被下候、尚此節者下野氏を当地之形勢者御詳達と、態与文略仕候、是迄御疎遠罷過、甚恐縮千萬、多罪御海涵可被下候、自後者新聞外之新聞御報告可申上候、中井兄折角御精励之由、為国大慶而已ナラス、為閣下にも奉万賀候、小生ハ碌々座却、田舎ニ隱遁之姿、終ニ開化之地ヲ踏能わす事歎と、遺憾此事ニ御座候、併何と欽素志相遂げ度、神禱之悲情御察可被下候、我友中者皆々大元氣、皆々我担任文之尽力者、此字御敬請可被下候余程盛ニ御座候、御休神可被為成候、先右迄奉得尊意度、如此御座候、拝復拜具、

五月七日

正義拝

7 御懇翰被下、忝拝誦仕候、陳者御持病相発、御加養中之趣、過剋戸塚公殿を承り候次第ニ御座候、迂生も先日を被犯風邪、引籠寝臥中御座候、陳者過日者大蔵省へ御出為被下由、実ニ失敬之至、何卒御海恕只々奉願上候、彼是と混雜罷在候故、乍存其後御無沙汰打過候、小生者明日迄引籠候者、必全快可仕候半与相考、最早別段之事ニも無之候間、御休神可被下候、将亦大山氏いよ／＼拜命相成候由、御示諭之通、是を警視之趣意も都合克相運可申与、相楽居候、拝顔何茂可申上候得

共、御断序、御断旁取束拝復、敬白、

十月十一日

正義

中井賢台

折角時下御加養專要ニ是禱、

8 愈御清適被成御出仕、奉敬賀候、陳者過日被仰聞候近日五代辺ニ而

御寛話云々、別而多幸、実者今日退省可參と、五代江約束仕置候処、

差懸用向到来仕候間、何卒明日夕景々、同人家江御集會、御高話拝承

仕度、御差支者如何、鈴木之事ハ拝晤ニ相省キ、右迄申入候也、

十二月十三日

正義

中井賢台江

七四 松本莊一郎

1「滋賀県廳

東京鉄道局

中井知事殿

松本莊一郎

親展

拝啓、先夜者高話相伺、大ニ胸襟ヲ快ナラシメ、難有奉謝候、扱其節

鳥渡御嚙御座候僚友坂地行ノ一件者、尚熟考仕候ニ、随分盤根錯節ト

ハ存候へ共、大体ニハ異存無之、キング之方ハ随分其事の運ビ様次第

ニ而、同意ヲ得候事も出来可申ト被存候、乍去其運ビ様トハ、先任者

の始末も程能出来ルノ見込相立、又候補者ヲ申立ル筋道も、大坂ガブ

ルノル辺の配慮ニ出候テ、会社員ノ腹ニ能ク這入りタル様ニ相成、キ

ングニ申出ルニモ、小生等内部のミならず、尚尊台々も十分ニ御力ヲ

仮サレ候様相成候ハ、可然駄ト奉存候、何分尚宜敷御配意奉仰度、右

者今一宿拝芝之上申上度候処、或者其前御帰任ノ儀も可有之ト存候ニ

付、為念以書中奉得貴意而已、草々頓首、

十二月十四日

莊一郎拝

中井高台

2「築地老丁目大椿楼ニテ

鉄道局ニテ

中井滋賀県知事殿

松本莊一郎

親展

拝啓、例ノ一件、井上長官ニ相話候処、大体ニ於而格別異存ハ無之、

阿氏も今の俣ニ据置タリトテ、本人ノ為メニ将来見込有之ト申ス訳ニ

者無之候故、相当ノ位置御座候ハ、何時ニ而も手放ス事ハ異議ナシ

ト雖も、彼ノ会社ノ方ハ最初々ノ歴史ヲ觀ルニ、随分困難物ニ相違無

之、如此処へ遣スハ本人へ対シ、友誼上甚タ不忍ノ感情有之、何分賛

成致兼ルトノ説ニ御座候、又其序ニ、阿氏もアノ才氣故、或ハ都合能

盤錯ニ当り得ベク、一時者十分ニ辛抱も致サル、駄ト被存候へ共、長

ク其辛抱ガ継続シ得ベキ哉、否ニ付而者、懸念も有之ナド、ノ評も御座

候、右ノ次第ニ付、其事ノ運ビ様次第ニ依而者、キングノ同意ヲ得ラ

レザルニハ限り不申ト被存候条、尚御含置被下度、小生も愈明日頃々

北海道へ参り、一月末頃帰京ノ考ニ御座候条、取込中右のミ得貴意候、

不宣、

十二月廿四日

莊一郎拝

中井高台

七五 松本重太郎

1「京都荒神口御幸橋西詰

大坂平野町四丁目

中井弘殿

松本重太郎

執事御中

謹啓仕候、

尊館御主君公御病氣之御旨伝承、早速御伺ニ参上可仕筈之処、世事ニ

紛れ居、久失礼、茲ニ以書中御容躰御伺申上度、昨今ハ如何ニ御座候

哉、精々御療養第一ニ奉万禱候、先ハ右御病氣御伺申上度、匆々拝具、

(明治廿七年) 十月七日

松本重太郎拜

中井弘殿

執事御中

七六 三島通庸

1 「築地二丁目十番地」

永田町二丁目三十三番地吉田方

中井弘殿

三島通庸

拝啓、御安康奉敬賀候、陳者明後十日、芝公園地紅葉館ニ於テ、那須

原開墾地初穂之雑煮餅并粗酒差上度候ニ付、当日午後三時ヨリ御来車

被下度、此段乍略儀以紙面得貴意度候也、

一月八日

三島通庸

中井弘殿

再伸、御差支之有無、乍御手数御報知被下度候也、

2 「築地二丁目拾番地」

中井弘殿

三島通庸

親展

謹啓、弥御清適奉賀候、本日不存寄勅任被進、月俸五拾円増給相成候

ニ付、籠酒指上申度候ニ付、御多忙中乍御迷惑、本日午後四時ヨリ茅屋

へ御来臨被下度奉待候、右御案内得貴意候、頓首、

十一月八日

三島通庸

中井弘殿

3 「中井弘様」

大椿様ニテ

親展

三島通庸

拝啓、只今西郷殿始会同仕候付、何卒即刻御縁合御来臨奉希度、細留

期望候、右御迎迄如此候也、頓首、

五月卅日

三島通庸拜

中井先生

貴下

4 「中井弘様」

品々相添

三島通庸

宅地一件ニ付而者、一方ならぬ御配慮成上候段、御礼旁参謁之含候得

共、何分病身ニテ始終御疎遠之至、偏ニ御海怒可被下候、陳ハ愚妻ニ

茂過日出京いたし候間、是又速ニ参殿可致候処、着涯ヨリちと不快ニ

テ療養中故、于今不埒之至、御仁免可被下候、微少なから土産之印迄、

米沢白地糸織菅反、同シ鳴地一反、外ニ菓子箱一進呈いたし候、御笑

納被下候得ハ、多幸之至なり、いつれ近日中快氣ノ上得拝顔、万々御

礼可申上候、其為略儀なから以粗毫如此御座候、敬白、

五月廿九日

三島

中井公貴下

5 「中井公」

三島

至急

只今参館候得共、御他出後故、不得止一筆申残置候、志賀云々之儀、

御咄申上度候間、御帰り次第、大椿楼まで御知らせを乞フ、

六月三日

三島

中井公

七七 三浦 安

1「京都府廳にて

大坂中之島花屋にて

中井京都府知事殿

三浦 安

私用急

十月四日

秋冷愈御健勝敬賀、然ルニ広島にて聞ク、近来御所勞卜、今朝来着、

山田ニ聞候処、腦充血症之由、儲々容易ならざる御病氣と存候、折角

為国家御保養專一万禱之至候、帰京ヲ急き候故、御近辺迄乍參、參候

ヲ不得、以書中御見舞申上候、匆々拝具、

(明治廿七年)

十月廿日

大坂にて 安

中井先生

研北

尚以、大浦參候ハ、伝言致候次第、其程難計ニ付、本文ニ上候、

御代筆ヲ以、東京迄御容体御回示ヲ乞、又拝、

七八 陸奥宗光

1「中井先生

宗光

朶雲拝読、明朝十時屹度參堂可仕候、右御請迄如此御座候、匆々頓首、

五月廿一日

宗光

桜洲老台

七九 森 有礼

1 昨日條公江面会之序、龍同留学公子一条相話候処、尚今日午後三時

夕五時迄、貴丈江親しく面談被致度、其旨弟々可相通様依頼有之、此書其為進呈候也、

五月十九日

有礼

中井雅丈

2「中井様

森

今夕五時半比々、夕食ニ御光来奉願、外ニ吉井・寺島等諸君三四名ハ

申遣置候、右願度、匆々頓首、

十月十日

有礼

中井先生

八〇 山縣有朋

1「東京麴町帝国ホテルニ於て

東京目白台

貴族院議員中井弘殿

山縣有朋

親展

「昨日之花翰昨朝拝読、如貴論交際上閉居謝絶之一点ハ、小生も猶

十分事情陳弁可致候得とも、老台進止決定前ニ於て、一言質をとり置

候事ハ肝要と察申候、他ニ一般視せられてハ、目的を達候事ハ無覚束、

非公平なる議論と存候、余事拝光ニ讓、草々不宣、

(明治廿六年)

芽城山人

桜洲老台

座下

2「中井桜洲翁坐下

有朋

内展急啓

「昨夕南禪寺畔小酌者、最モ妙味有之候、今夕三夜莊ニ約し置候、午

後より御出かけ被下候ハ、隨行可仕致御待候、為其早々頓首、

八月十九日

芽城山人

桜洲先生

梧下

3 「中井滋賀県知事殿

山縣朋

親展急啓

昨夜者大醉失敬を働、御海恕可被下候、于時御相談致度儀有之候間、
暫時内閣にて御面晤仕度、如何之御都合ニ御座候や、今夕ハ芽城草
廬江罷越候故、自然御閑暇御座候ハ、御來訪被下候てもさし支ハ無
之、孰ても御都合ニ相任せ申候、御一報可被下候、草々如此、頓首、

五月十九日

有朋

桜洲老閣

4 「木挽町にて

中井弘殿

山縣朋

親展急啓

貴簡拝読、今日芳川方ニ罷越、御面話之儀可申試存居候処、無抛用事
出来候付、明日午時比より、芳川方にて拝晤を得度存候、先ハ拝答旁
開陳仕候、草々頓首、

六月廿八日午後六時

芽城山人朋

桜洲老台

5 「築地二丁目十一番地

中井老台

有朋

親展急復

花章今日接手、先以御勇健御上京敬賀、今春ハ京師罷登り可申相含居
候処、遂ニ不果遺憾之至ニ候、久濶之世話一口も直ニ拝承致度、明夕
御閑暇ニ候ハ、四時比より御來訪被下候得ハ仕合候、余事万拜光ニ
在、草々頓首、

五月五日

芽城山人朋

五月五日

芽城山人朋

桜洲老兄

梧下

6 「中井老台

有朋

親展復

貴翰敬読、只今來客中にて、別書ハ後刻返却可仕候、貴答計草々、他
ハ拜光ニ讓候、頓首、

十二月四日

有朋

桜洲老閣

7 「桜洲中井老台

山縣朋

内啓復

明日於大椿楼、忘年小集御催ニ付、御懇書難有拝読、夕景可罷出と
相楽居申候、草々拜復、

十二月廿八日未明

桜洲先生

含雪

机下

8 「築地 九段

中井様

山縣

内啓急キ

御清福万賀、扱ハ今夕伊西両氏同伴、參堂之筈ニ有之候処、突然無扱
来客有之、今夕ハ罷出留候付、御序西伊両氏江御一声相願候、頗遺憾
痛情御一咲、草々頓首、

三月廿一日

有朋

桜洲老兄

梧下

9「桜洲先雄

椿山莊主

親展拝復

貴書拝読、昨夜ハ失敬仕候、弥今夕御發途之由ニ付而ハ、今夕四時前
迄ニ、御約束之注文物相調、さし出シ可申候付、御面倒ながら、御と
り歸り可被下候、来客中乱毫高怨、時下御自愛所祈候、草々頓首、

十二月廿六日

有朋拝復

桜洲老台

10「中井泉令殿

有朋

内展

昨夜者亦醉倒、汗顔之至ニ候、扱今日ハ何時乘船之御都合ニ候哉、拝
承仕度候、数日之流連奇談も又不少、御冷笑可被下候、今日ハ參堂不
仕、令閨江可然御致声相願候、匆々頓首、

廿七日期

含雪

桜洲老台

11「中井工部大書記官殿

山縣朋

親展急復

又昨夜之例之醉倒、一般愛技江御致言、一咲、

今朝御内談有之候木材之一事并赤羽祢分局取纏之儀、細縷被仰聞拝承、
且御談を遂置候様、品川硝子製造所補額之儀ハ、左之通相決候、

伺之趣ハ、先以十六年度試験費ヲ二万円と定、赤羽祢營業資本金之
中を以可下渡、可成早々返納取計、支弁致スヘク、尤實際ニ於テ返
納方差支候節ハ、操旨可下渡云々、

御了承被成宜敷候、將御來談之儀拝承、明日夕景御待可仕候、草々敬
復、

五月三十一日

有朋

中井老兄

12「

山縣有朋

益御清安奉賀候、陳者過般、御一覽ニ入置候スタイン著、李国兵制及
憲法爭議者、都合ニ依り、中部より纏出致し末ニ有之、今回巻首之分
成訳相成候間、一部差上候、御落手可被下候、追々続訳出来次第、猶
御廻送可及候、右拝啓致度、草々敬具、

三月十七日

有朋

中井知事殿

13 拝啓、過日御廻致候兵制論及憲法爭議第一差上候、御落手可被下候、
頓首、

三月廿三日

朋

中井老兄

14 今晩遅々なれハ、明朝十字比歸り可申合、氣を被付候様致し度、
草々如此、

七日

椿山莊主

石崎殿

15 人力車を京ニさしこし候様ニと、車夫ニ申含候、直ニ五番丁之方江罷越候付、夕景ならて八歸院不致、来客江ハ此辺御通知置相成度事、

椿山莊主

石崎との

いそぎ

16 「東京小石川区目白台

山縣公爵邸内

相州小田原板橋

石崎正明殿

古稀菴主

親展

松本長八十七日以後にてよろしく候、此書状大島少将江歸京之節、御

届相試度候、

八月七日

古稀菴主

八一 矢野文雄

1 「京都府 本邸

東京赤坂表町三、二

中井弘様

矢野文雄

御見舞状

拝啓、新聞にて承知致候処、御重患之趣驚入申候、其後如何被為在候哉、深ク御案申上候、時候不順之節、日天之御加養奉祈候、先ハ不取敢御容体御伺迄、如此御座候、草々頓首、

十月九日

矢野

中井老台

侍史

八二 山尾庸三

1 過刻来ル七日と申上候之者、八日積ニ有之候間、其含之事、大山兄

江御間合奉願申候、敬白、

七月四日

庸三

中井公

八三 山縣伊三郎

1 別紙辰吉徴兵適齡届、捺印ノ上御廻しニ及び候、即区役所へ被差出被下度、尚記入を要スヘキ分之内、戸主所得税高其他一ヶ条ハ、小生方にて不相分候間、提出前夫レ々御認メ相成度、右御願迄、草々如此、

一月二十日

伊三郎

石崎殿

八四 山崎直胤

1 「中井滋賀県知事殿

山崎直胤

必親展

拝啓、菊花之候、益御壮栄奉悦候、過般尊書頂戴仕候処、当時中国四国辺、去九月水害地方之知事等、数名上京中ニ付、彼是取紛レ、御請も得不仕、御無音罷過候段、誠ニ以不相濟事ニ御座候、頃日芳川次官々御面会、京地之近況御聴取、且久々振ニ而之御面会、定而御快壯之御事も不少義ト奉遠察候、京地先日無事天長節之招会、観菊会杯、内外人打混而之会合、年々進歩盛大ニ赴キ、貴夫人之踏舞洋服杯、別而目立チ申候、英船沈没一件ニ就而ハ、輿論之激動不一片、福地源一郎子之如キハ、昨日横浜ニ而特ニ一条ノ演舌ヲ為シ、義捐金モ盛ニ投

入有之候由、多少之「デモンストレーション」も、当然ニ可有之奉存候、
独人モ一七内務省ニ出勤、国法論之講義等有之、生等一同聴聞仕候、
地方制度改正案も、今猶確定ニ至不申、実施之日殆ント難期様被存申
候、

○如何之義ニハ考へ候へ共、内々相伺度一事、左ニ申上候、築地御邸宅
若シ御讓渡ニも相成候へ者、御相談相試度ト申居候人有之候、自然御
讓渡之御内意も被為在候へ者、価格ハ何程位ニ可有之哉、至急御内報
奉願候、先ハ御無音之御詫旁右申上度、書外後鴻ニ讓候、為邦家時下
御自愛專一ニ奉折候、勿々頓首、

十一月十五日

直胤

中井老大人閣下

八五 山田顕義

1 今日西郷氏相尋候処不在ニ付、晚景如何ニ聞合候処、紅葉館ニ罷越
候よしニ付、明朝罷出候覚悟御座候、右御報、草々、

七月廿七日

顕義

山縣様

山田顕義

2 「中井弘様

山田顕義

」

拝読、来ル十三日会合、元秋月別荘ニ御案内被成下、難有敬承仕候、
午後三時比、必ス参上致候、
大山君結婚ニ付、贈物之義候ニ、小生も何欸と配慮中之処、幸ニ御君
考有之、大ニ仕合申候、乍御面倒、伊藤其外同様可然御依頼仕候、余
万期拝青、草々不備頓首、

十一月八日

顕義

桜洲賢兄

八六 山地元治

1 「中井弘蔵殿

山地元治

四月廿六日

前略、

如貴命必参堂可仕、余拜眉之上、御挨拶可申上候、早々頓首拝、

四月二十六日

元治

中井老兄

八七 由利公正

1 「中井様

由利拝

御直拔

前書御高免可被下候、陳ハ砒山願置ニ付而ハ、過日山尾公江委細様述、
坑業休止ニ不至内、一応御見分被成下候様、難願致置候処、其後伊藤
公御出席無之、未だ御評議不相成趣、一昨朝承り候、右ハ御用多中、
急キ立候義、甚恐入候得共、実坑業維持方、当年中も無覚束為体、且
又御見分被下候上ハ、精々後来無用之失費不相成様、伺出度心底ニ付、
何卒速ニ御評議相成候様、御注意被成下度、此段願上候、尚拝願可申
上、未だ御休足中ニ付、乍失敬以書中願上候也、

十一月廿六日

公正

中井様侍史